
拷問病——バッドエンドストーリー

ほたるゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

拷問病——バッドエンドストーリー

【Nコード】

N8049G

【作者名】

ほたるゆき

【あらすじ】

殺し合いの途中、ただごとではない様子で苦しみだした妹紅。彼女が、苦しみの中で蓬萊の薬を飲んだことによる病気だ、ともらした。

「ぐはあっ！」

とつぜん胸を押さえて苦しみだした妹紅に、私は思わず攻撃の手を止めた。

聞いたことのないほど低く、思わず体が震えてしまうような声を絞り出している。

「な、何、どうしたの!？」

今の言葉が、私の攻撃を受けての断末魔なら気にすることはない。

だけど、私はまだ何もしていない。ただ、しようとしたただけだ。なのに何だこの苦しみようは。

まるで、万力で喉を挟まれているかのような声だ。

ギリギリ、という音さえ聞こえてくるような気がした。

殺し合いの最中だということも忘れて、思わずうずくまる妹紅に駆け寄る。胸を押さえて苦しむ妹紅。

その肩に手を置こうとしたのに、妹紅は私の手を乱暴に振り払った。

「さわるなっ！ 大したことない！」

払われた手が痛かったけど、思っていたよりも元気そうな声で安心する。

「大丈夫なのね？」と念を押すと、ゆっくりだけど妹紅も立ち上がった。

「ぐ……！」

だけど崩れて、またうずくまる。

血でも吐きそうな声を出しながら、胸を押さえる。その口から出るのは荒い息。どこからどう見てもただごとじゃない。

「今永琳呼んでくるから！」

「いい！ これはただの病気じゃ——ぐうつ！」

病気？ 病気なのか！？

そんなの聞いたことない！

「妹紅、病気って何、どういうことなの！？」

「うるさい！ お前たちはあの薬を飲んでも平気だったろう、けどどな！」

「だけど！？」

「私は地球人だぞ、お前たちの作った月のものが——」

最後まで言うことも叶わず、妹紅は左手を地面についた。相変わらず妹紅の声は私への憎しみのせいか死にそうな人とは離れているけど、さっきとはちがい額には汗が浮かんでいる。顔も真っ赤だ。

月のもの？ 月のものがダメだったのか！

そうか……妹紅は私たちとはちがう。月の人が大丈夫で、地球人には合わない成分が蓬莱の薬に含まれていたんだ。

何てことだ、妹紅は——！

よくない想像がいくつも頭を過ぎったけれど、どうなるのか、それは私にはわからない。

おそらく、永琳でさえも。

「ぐ……っ……」

体がうずくのか、男のように低い声でうなっている。地面に転がり、体を抱きかかえるかのようにしてうめく。乱れた服から、肌を覆う包帯が見えた。

まるでミイラのように、ぞおつと寒いものが走った。

しかし、そつちに注意なんて払ってられない。

妹紅の苦しみかたが、溺れている人のようにだ。生きようと、でも死にそうな姿。

でも、でも——私は浮き輪なんて持っていない。妹紅を助けることが出来ない。

歯がゆいけど、永琳しか助けられる人はいないのだ。

「永琳を呼ぶからね！」

「邪魔だ、どけッ！」

「あっ！」

妹紅は私を突き飛ばし、自分の家の方角へと向かっていった。何度か、空から落ちてしまいそうになって。

私はそんな彼女を、追うことはできなかった。

「妹紅……」

拒絶された、という気持ちが私の中にいつまでも座っていた。

あれから何年も経った。

それまでに何度か妹紅に会ったけど、いつでも元気そうだったのを覚えている。

でも私は、それがどうしてか、あの病気はいつたい何だったのか、聞くことが出来なかった。

聞こうとするといつも、拒絶されたあの日のことがよみがえったのだ。

「輝夜、勝負だ！」

ふすまを蹴破り、私の部屋へと飛び込む妹紅。

よかった、今日も元気そうだ。

だけど、この怒りの表情の裏には、どれほどの苦しみが隠されていることだろう。私の知らない痛みを、どれほど経験しているのだろう。

あの日の妹紅が、常に頭から離れない。またあんなことになってしまうのではないか、と考えると胸が潰れそうだった。

永琳に一度、妹紅のことに付いて相談したことがある。永琳は、黙って首を横に振った。

私は永琳につかみかかり、「何とかしてよ！」と叫んだ。だけど永琳は、黙ったまま。

妹紅を助けることが出来ないという絶望感が、私の中を満たした。

「何してる、はやく立て」

動かない私の肩をつかんだ妹紅が、無理やり立たせようとする。

「……あ、何？」

その手を、思わずつかんだ。すると、妹紅が引っぱるのを止めた。

「妹紅」

「何だよ」

「あの病氣、治ったの？」

「は？」

妹紅は「何だそれ」と言いたそうな顔をしている。

「治ったのね！」

じわりと心にあたたかいものが広がり、胸をほつとなでおろす。
よかった、治ってたんだ……。

「何だよ病氣って」

「妹紅昔よく言ってたじゃない、『ぐ……静まれ、静まれ私の腕よ！』とか『くそっ、こんなときまでヤツらが……！』って！それに、たしか包帯もいっぱい巻いてたよね。

永琳に聞いたんだけどあれってちゅ——」

その言葉を言い終わる前に、目の前に妹紅の拳が飛んできた。拳の向こうに見える妹紅は、なぜか真っ赤になっている。

拳が当たる直前、なぜか時間の流れがスローモーションのように感じられて、あれ、どうしたんだらう——とぼうつと考えていた。

その答えを出すよりはやくに骨が砕ける音がして、それっきり何も聞こえなくなった。

私はいつたい何をまちがえたんだろう。
そんなことを考えながら、私の意識は闇に溺れていった。

(後書き)

死にたい、でも死ねない。

[illegible]

…… あ、「キャラ死にます」って注意書き忘れてました。
ごめんなさい。

ただ、BAD ENDを書いてみたかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8049g/>

拷問病——バッドエンドストーリー

2010年10月9日19時44分発行